かっぱどっくり

「河童徳利」

茅ヶ崎のお話

江戸時代、五郎兵衛という働き者がいた。

ある日、野良仕事を終えて、川で馬を洗っていると、突然

葦の茂みからカッパが踊り出て、馬の尻にかみついた。

馬はその痛みに大きな声で鳴き続けている。

おどろいた五郎兵衛が、カッパをとらえて、大きな木に縛りつけたところ、カッパは泣きながら、

「ごめんなさい、とんだ悪さをしました。二度としないから、ゆるしてください」

と詫びたので、縄をといて逃がしてやった。

夜、五郎兵衛が寝ていると、昼間のカッパがやってきた。

「助けていただいたお礼に徳利を差し上げます。

おいしいお酒がかぎりなく、なんぼでも出てきますだも、

底を3回たたくと、止まっちまいます。どうかいい塩梅に使ってくださいまし」

Copyright © 海のまち朗読館 All Rights Reserved

そう言うと、カッパは消えていった。

それからの五郎兵衛は、お酒を飲んでは眠りこけ、覚めては飲んだくれて、働くことをすっかり忘れていた。田んぼも畑も草ボーボーだ。

ある日、五郎兵衛は足をふらつかせながら、ふっと馬小屋をのぞいた。やせこけた馬が、五郎兵衛を見て懐かしそうに鳴いた。

五郎兵衛の心がトキンとなった。

「えらあ、やせちまったでねえかよ。無理もねぇ。とんと野良へも行かねえもんな」

馬は懐かしそうに五郎兵衛に頬ずりして離れようとしない。

「この徳利のためにお酒ばかり飲んで、お天道様にすまないことをした。そうだ！」

五郎兵衛はカッパのことばを思い出し、徳利の底をポンポンポンと三回叩いた。すると、今まで酒が溢れていた徳利が枯れて一滴も出なくなった。

それからというもの五郎兵衛はまた、元のように働きだしたということだ。五郎兵衛の家ではカッパからもらった徳利を末代まで家の宝としたそうな。

Copyright © 海のまち朗読館 All Rights Reserved